

薔薇の粧

安アパートのドアが軋みながら開き、秋風と共にエレンの香が六畳間に流れ入る。笑みを含む柔らかな艶を帯びた声音が、机に向かう俺の首筋にかかる。

「今日も図書館で勉強でしょ？ はい、お弁当」

その手弁当を民事訴訟法の参考書と共にナップサックに入れる。

司法試験浪人の俺が高級クラブのボーイ募集広告を目にしたのは夏の初めだった。「求む・容姿端麗な二十代の男性」というチラシを手に事務所を訪れた俺に対応したのは、三十半ばかと思える女性だった。エレンと名乗るその人は、辞書の「麗人」という語が紙面から抜け出た女だった。「それではYさん、来週からお願ひしますね」と言ってくれた彼女の目の奥に星屑のような瞬きを見た気がした。思えば、今の全てはあの時に始まった。

クラブでボーイとして働き出した俺が徐々に知ったのは、この店の責任者であるエレンは独身らしいこと、前はヨーロッパや中東にも住んでいたらしいこと、そしてめつたに接客はしないが、たまにステージでシャンソンを歌うこと……などだった。

彼女の波打つダークブラウンの髪、紺のロングドレスの薄いとさえ見える肩のラインから続く胸の豊饒、フランス語で「枯れ葉」を唄う深い美声が俺の夢に出るようになるのに時間はかからなかった。店内での色恋沙汰はご法度だったが、忍ぶれど……というやつで、ボーイなどは召使同然にしか思わない若いホステスの一人は、冷笑して言ってくれたものだ。

「Yくん、エレンさんに首つたけみたいね。無駄だと思うけど」

かすかな嫉妬も匂わせて、こちらの表情のミクロまで盗み読もうとする煩わしいその視線を何とかやり過ごした。ホステスたちさえ気づいている俺の片恋を、当のエレンが悟らないはずもなかったが、高嶺に咲く薔薇の美しい横顔のシルエットはいつも静謐だった。

突然のブレークスルーは、俺の熱情が客の一部にさえ知れてしまった晩夏の嵐の夜に訪れた。客足もないその晩、俺は業者の納品リストを収めにエレンのオフィスに入った。デスクでパソコンに見入るエレンを直視せず、無言でキャビネットに書類を収め、足早に部屋を出ようとする俺の背に、彼女のためらいに揺れる声が追いついた。二人きりの密室の、窓ガラスを叩く雨音よりも低い声音だった。「……お店、辞める気ある？……」

遂にクビかと覚悟した。潔く「はい」と即答するつもりで振り向いた俺の目を、立ち上がった彼女は初めて会った時と同じくストレートに見詰め、緊張にかすれた声で言った。

「本当に、私でいいの……？」

俺は店を辞め、工事現場のバイトに鞍替えした。彼女と濃密な時間を過ごすようになってから、司法試験合格は俺だけの夢ではなくなった。二人のために闘えるだけの社会的な力が欲しい。晴れて合格し、司法修習生となった暁には二人で東京へ移住する。渋谷だ。日本で初めて同性パートナーシップ条例を掲げてくれたその街で、二人の愛の巢を営む。

女性化手術を重ねるためにタイやモロッコを遍歴したエレンの旅路の、そこが終点になるはずだ。彼女もその日を心待ちにしてくれている。さあ、今日も猛勉強だ。